

下野谷遺跡第36次の発掘調査について

◆調査の目的と方法

昨年夏に実施した35次調査において、復元住居の候補とした35-3号住居の設計のために不足していたデータを得るために、住居範囲内にトレンチを設定し調査を行った。

◆調査期間

令和4年2月28日（月）～3月10日（木）

◆調査結果

新たに設定したトレンチからは、支柱穴と考えられるピット3基（P2～4）と柱穴を結ぶ溝2本が検出された。また、35次調査のトレンチを再精査したところ同様の支柱穴間の溝を確認することができた。支柱穴を結ぶラインより内部の床は固く締まっている。

35次調査で検出された35-4号住P1を再調査しトレンチ壁で覆土の再確認をした結果、35-3号住の支柱穴と考える他のピットとは異なることを再確認したため、このピットは35-4号住に伴うものと認識した。

また、支柱穴よりも小さく浅いピット2基（P5・6）も検出された。

出土遺物は、縄文土器264点、石器48点、礫57点で多くは上層部から出土している。縄文土器は勝坂式2、3式が主体である。

◆調査成果と復元の考え方

今回の調査結果と35次調査の成果を合わせ、復元に向けた住居のプランを図のように想定する。

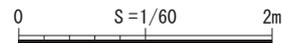
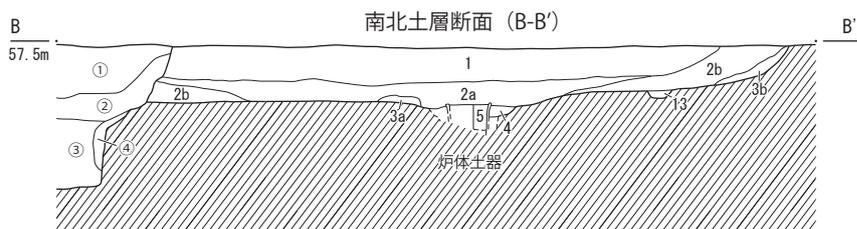
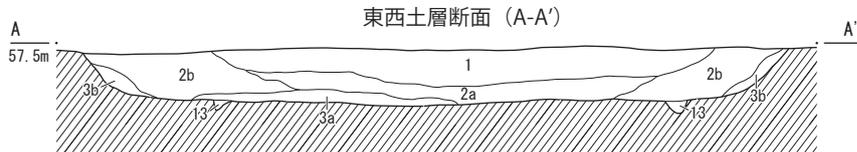
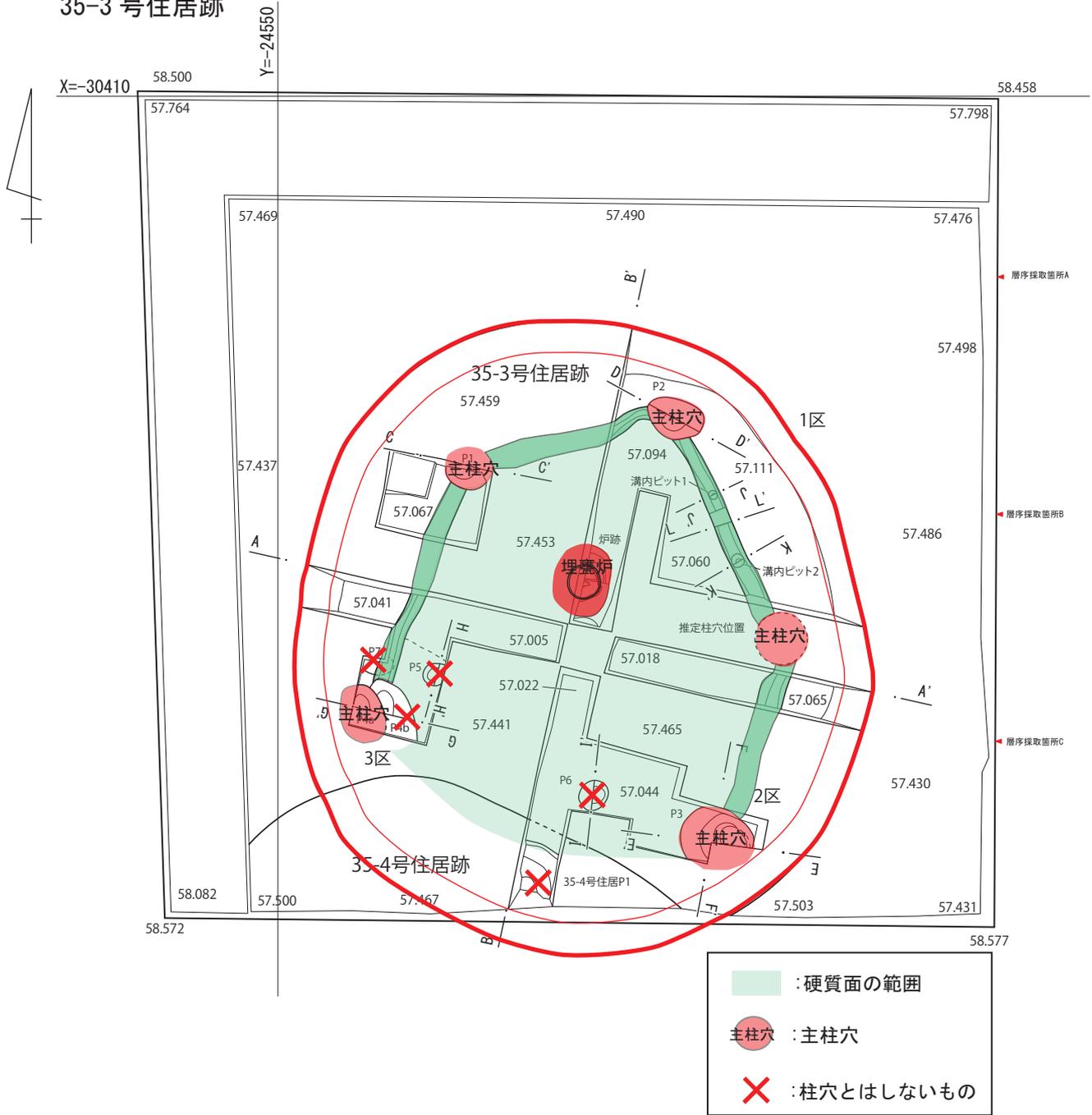
北側が35-4号住居に切られているが、住居の外形プランは残存部から想定し長軸はやや東による南北5.8m、短軸はやや南による東西約5.5mの楕円形とする。支柱穴は5本（1本は未調査だが柱穴間を結ぶ溝の位置から想定）とし、支柱穴間を結ぶ溝により竪穴内の空間が区画されている。

入口は南南西に開口し、P6は入口施設に関わる可能性があるが明確ではない。また、P5は深度も浅いため、対応するものとは考え難い。

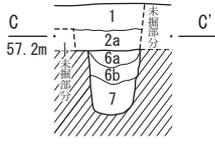
壁際周溝は存在しない。

炉は勝坂2式の深鉢を用いた埋甕炉とする。

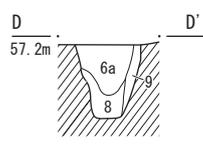
35-3号住居跡



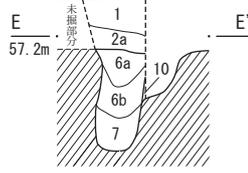
P1土層断面 (C-C')



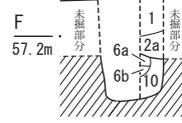
P2土層断面 (D-D')



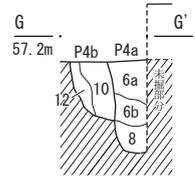
P3土層断面 (E-E')



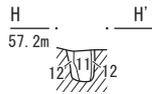
P3土層断面 (F-F')



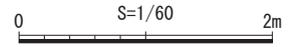
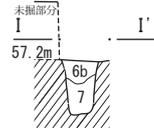
P4a,b土層断面 (G-G')



P5土層断面 (H-H')



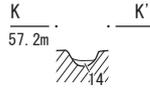
P6土層断面 (I-I')



溝内ピット1土層断面 (J-J')



溝内ピット2土層断面 (K-K')



溝土層断面 (L-L')

